

余白の風

求道俳句で南無アツバ

二〇一四年三月号
第二〇七号
奇数月一〇日発行

発行と一
幸こ栄
主宰 白平
余 余平

*日本人の心の琴線にふれるイエスの顔を求め、福音を生きる

会員作品とエッセイ (*主宰コメント)

魚住るみ子 (練馬)

南無アツバ二人目曾孫も男の子なり降誕祭のその日生れぬ

南無アツバ乳吸ふ唇のいっしんにたくましくこそこの現つ世を

兄となり嬰兒に見入る三歳児赤ちゃん返りのきざしそこはか

*「二人目も男の子」！末は神父かイクメンか。昔は家の跡継ぎとして男子出産を喜んだものですが、今はまた違った楽しみがありますね。おめでとうございます。

片岡惇子 (名古屋)

一瞬の決意寒水手に受ける

約束の駅に佇む冬菫

闇の中光となりぬ白椿

背伸びする大根のあり天のあり

大寒や寂しさだけが固まりぬ

冬枯れに私も枯れて主の恵

*①お手紙に「今年はあるもこれもでなく、一点だけ励んでみます」と「決意」を新たにされてきました。わたしたちの信仰も、「南無アツバ」の「一点突破」型でいい！ ⑤「寂しさ」は「固まり」、喜びは拡がることも。

佐藤淡丘 (豊田)

連嶺や一つ残りて春の星

摘みたればさみしき記憶 齋かな

春の雲遠山にあり降りてこそ

啓蟄や土管の水も流れ出す

水鳥の去りし沼なり水温む

早朝、「会神の丘」で独り祈るとき、一陣の風が、まさに「おみ風さま」となって通り過ぎるのを何度か味わうことがあります。

三位一体の神さまは、こうして触れんばかりのお恵みを下さるのですねえ。

再びひれ伏して祈りました。南無アツバ、南無アツバ、と。

*「会神の丘」での「南無アツバ」。これが淡丘さんの「一点突破」です。昔、ある神父様に「最近ロザリオをやっているのですが、これをやっていたら何か見えてきますか」と聞いたことがあります。すると、「十年続けたら、何も見えなくてもいい、ということが見えてくるよ」と言われたことを思い出しました。

瀧野悦子 (京都)

会ふ度に大きくなりし孫七人戦無き世を

祈るアツバに

今ここが神の国だと神父説くアツバとわ

たしそしてあなたも

復活の頃に良くなるきつとなる癌病棟に

友をのこして

淡雪やパンとチーズと南無アツバ

*①世代交代は寂しくもありうれしくもある。

②神の国は完成に向けて「すでに」始まっている。③「希望」は確かに私たちを支える。それを「気休め」というのは傍観者の言葉。

山本久子 (庄原)

体調も心も崩れてみ光とあう

この痛みを大切に南無アツバ

南無アツバ、薬をポケットに列車に乗る

*①「み光」や「あう」など、ひらがなが生きている。幼子の心そのまま、なるがまま。②こういう境地は「十字架の逆説」がわからなければ出てこない。③なぜか芥川の「蜜柑」を思い出しました。

赤松久子 (高知)

星々の示すブラックホールかな

宇宙より見ゆる高知の小さき灯よ

星生まる神のみ業に目を見はる

神道は祖先崇敬南無アツバ

バレン・チョコ君に捧げて南無アツバ

*①輝く「星々」が指し「示す」のが、「ブラックホール」という暗闇——あたかも神の「無」のようです。②逆に、高知から見れば皆「小さき」星々よ。

井口萬里子 (三浦)

キリストの最後の晚餐思はする会食なり

きユダは混じらず

ひとりにはあらずキリストが吾に在る姉

逝き幾日か経て思ふなり

姉逝きし悲しみの果て神の掌の大きはか

らひに思ひ到りき

*家族や友人が亡くなってから、むしろ生前より身近に感じるといふことしばしば。その場は「神の掌」、取り持つは「キリスト」。

平田栄一（蓮田）



倫理説く聖句は嫌い銀杏散る
罪の棲む身にも望みや曼珠沙華

寄贈誌より

「日矢」五八号・新堀邦司
立つときも小鳥は赤き実を零す
むさしのに落葉の匂ふ日和かな

*①「立つ鳥跡を濁さず」ということわざがありますが、どんな所からも去るときは必ず痕跡を残すもの。できるだけ良いものを残したいのが人情ですが、そうはいかないのが人生。そこに「ゆるし」の福音がある。

「花組」六一号・あざ蓉子
伝えてよ校庭はみな牡丹雪
夕顔や葉を忘れないように

「祭演」四七号・森須蘭
裸木や徐々に夫婦になつてゆく
巻き戻し出来ぬ人生蜜柑剥く

平田講座要約(第三二回下～三三回)

2012・12～2013・1 II テキスト『心の琴線に触れるイエス』

p.41D (続2)

さらに、田川建三氏の論を参考にすると、パウロの手紙に出てくる「神への信仰」は「神の

信」＝神が罪びとを救うと約束した誠実に「信者の信」が応えるという意味合いがある。そのほかに、「キリストへの信仰」と訳されているのは、本来「キリストの信」(例 ガラテヤ2・16、ローマ3・22)＝イエスへの私たちの信仰ではなく、イエスがそういう神に信頼する、という意味の可能性を示唆している。とすれば、わたしたちに代わって、イエスが神様に信頼をおいてくださった、その「信」によって、わたしたちが救われる(信者の信仰じゃなく)というニュアンスが出てきて、あちら様が、より主体的に「寄り添うイエス」「同伴者イエス」という、遠藤・井上神学に近いかもしれませぬ。

【第三二回】

さらにあと二人紹介します。

織田昭氏『ガラテヤ書の福音』では「正味の福音」ということをおっしゃっています。すなわちそれは、善行のようなプラスαがいららない、ただ聴聞を喜ぶ福音ということなのです。

そして青野太潮氏『パウロ神学者。もうお馴染みですね。パウロの「十字架の逆説」ということを強調しています。伝統的な贖罪論を否定はしません、贖罪論一辺倒のこれまでのキリスト教には批判的です。

「私たちはキリストにあるものとして、この世の不条理さ、無意味としか思えない苦しみ、みすばらしさ、弱さ、そういうものを担って生きるように召されている。」

しかし、キリストにある逆説は、その弱さ・愚かさをも、本当の意味での賢さ・救い・祝福へと変えてくださるのだということ、私たちが聞き取っていくべきだと思います。『私もまたイエスのように』二〇〇二年六月三十

日礼拝説教)

この「十字架の逆説の神学」の言い回しが井上神父の文脈に一番近い気がします。【参照I コリント1・23、2・2、ガラテヤ3・1、マルコ16・6】

「キリストは今もなお、『十字架につけられ給ひしままなる』(エスタウローメノン・現在完了分詞) *having been crucified* 姿をもつて、私たちと歩んでくださっているのです。しかも復活されたキリストとして、共に歩んでくださっているのです」(説教・講演集『十字架につけられ給ひしままなるキリスト』209頁)。これが、青野先生の十字架と復活の理解なのだと思います。

「だからこそ、そのような復活のキリストは『私の恵みはあなたに対して十分である。力は弱いところにこそ完全にあらわれるのだから』(IIコリ12・9)ということがおできになる方なのです。」

井上神父にとって、キリストは復活して「余白の風」になった。私の求道俳句の機関紙は、この言葉をいただいて、命名したのです。それも早いもので、二〇〇号を突破し、四半世紀近く続けています。

毎月の南無アツバの集い&平田講座 於：四谷ニコラバレ 3/22(土)、4/26(土)

「余白の風」入会案内

*どなたでも参加できます。*年六回寄数月一〇日発行
*投稿は原稿用紙使用。採否主宰一任
*締切日偶数月十日 *問い合わせ 余白メール
*年会費千円(送料共)*フログ「南無アツバを生きる」に掲載 *〒振替口座〇〇一七〇一三一二六〇九〇九 平田栄一